# 24［評論］　『日本語と日本思想』

　三上章は不運な学者であった。彼の主語廃止論は思わぬ抵抗にａソウグウした。その抵抗は彼の同胞、同学の士によるものであった。エピソードによれば、彼は、早々と一九四二年の時点で、自らの主語廃止論によって「主語」という言葉が消えてなくなるにちがいないと本気で信じていたとのことである。［　　Ａ　　］、抵抗は厳しかったのであり、「主語」という言葉は日本語の文法論からいまだに消えてはいないのである。

　ｂシュウチのように、三上が採用した主語廃止論のための基本的な手順とは、二重の操作によって、「主題」でもって「主語」を国文法から閉め出すことにあった。第一の操作は、「Ｘハ云々」のハを主題（あるいは提題）の助詞と名づけることであり、第二の操作は、「Ｘガ云々」のガを「主格補語の助詞」と名づけることであった。これは、むろん、日本語の最も根本的な文型を、「主述（主語・述語）」文ではなく、「題述（主題・述語）」文であるとみなすことでもあった。［　　Ｂ　　］、三上は、彼の主語廃止論の理論的根拠を、本居宣長の「係り結び」の研究の中に認めることになったのである。

　三上章の①この戦いは、一見成功したかに見える。［　　Ｃ　　］、三上の根本的な主張の多くが、現在では、広く取り入れられているからである。ところが、そこに問題がないわけではない。ここで二つの疑問を提示してみたい。一つは、三上の主語廃止論の中に、一種の、いわば形而上学的な予断とでもいったものが紛れ込んでいはしないかという疑問である。私は、三上の「主題」概念の中に②一種の理論的予断のいをかぎつけないわけにはいかないのである。もう一つは、三上の文法論の乗り越えを目差した三上以後の文法学者がはたして三上から前進しているのであろうか、という疑問である。私の印象では、三上から前進しようとした有能な文法学者が、ある本質的な意味において、逆に三上から後退しているように思えるのである。《中略》

　三上章の文法論にみのない人のために『象は鼻が長い』のｃボウトウの一節をここで引用しておこう。小見出しには「１・③Ｘハの両面」とある。

日本語でｄテンケイ的な文（センテンス）は、「Ｘハ」で始まる題述関係の文です。公式で一括して

Ｘハ、ウンヌン。

と書くことができます。題目の提示「Ｘハ」は、だいたい「Ｘニツイテ言エバ」の心持ちです。上の「Ｘニツイテ」は中味の予告です。下の「言エバ」は話し手の態度の宣言であり、これが述部の言い切り（文末）と呼応します。

後者、すなわち文末と呼応して一文を完成する仕事は「ハ」の本務です。前者、すなわち中味への関与の仕方は「ハ」の兼務です。「Ｘハ」には、本務と兼務との両面があることを知り、始終それをｅネントウに置くことがたいせつです。

　この簡潔な一節の中に三上の文法論の骨子がみごとに表現されている。ただ、たった一つ不満なのは、「Ｘハ」が「Ｘニツイテ言エバ」と、等号で結びつけられてしまう方向へと横滑りしていることのみである。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　二重傍線部「形而上学的」と意味の上で近接しているものを次から二つ選べ。3点×2

ア　抽象的　　イ　実在的　　ウ　相対的　　エ　観念的　　オ　身体的

〔　　　〕

問２　空欄Ａ〜Ｃに入る最も適当な語句をそれぞれ次から選べ。3点×3

ア　もし　　　イ　なぜなら　　ウ　しかし　　エ　つまり　　オ　そして

Ａ〔　　　〕　Ｂ〔　　　〕　Ｃ〔　　　〕

問３　傍線部①とは、どのような戦いか。本文中の言葉を用いて、二〇字以内で答えよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　傍線部②とあるが、筆者は何をそのようにとらえているのか。三〇字以内で答えよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問５　傍線部③とは、どのようなことか。本文中の言葉を用いて、二五字以内で説明せよ。8点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　本文の内容（筆者の主張）と合致していないものを次から二つ選べ。6点×2

ア　三上章は、早くから主語廃止論を唱えていたが、その主張はだれからもまったく相手にされず、不運な学者といえる。

イ　「主語」という言葉は日本語の文法論から消えてはいないが、三上章の主張の多くが現在では広く取り入れられている。

ウ　三上章の文法論の乗り越えを目差した三上以後の文法学者たちは、三上から前進していないのではないかと思われる。

エ　三上章の主語廃止論は多くの思わぬ抵抗にあいながらも、結果的には成功を収め、現在では広く理解されている。

オ　三上章は、主語を廃止するため、二重の操作によって、「主題」でもって「主語」を国文法から閉め出すことを考えた。

カ　三上章は、その著書『象は鼻が長い』の中で「Ｘハ」で始まる文について、本務と兼務の両面があると述べている。

〔　　　〕　〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ遭遇　ｂ周知　ｃ冒頭　ｄ典型　ｅ念頭

問１　ア・エ

問２　Ａ＝ウ　　Ｂ＝オ　　Ｃ＝イ

問３　日本語の文法論から「主語」を廃止する戦い（20字）（傍線部の内容がなければ、それぞれ４点減点）

問４　「Ｘハ」が「Ｘニツイテ言エバ」と等号で結びつけられること（28字）

問５　中味の予告と文末と呼応して一文を完成する仕事（22字）

　　（傍線部の内容がなければ、それぞれ5点減点）

問６　ア・エ

■覚えておきたい語句

□5周知……………………広く知れ渡っていること。

□11一見……………………（副詞的に）ちょっと見たところ。

□28骨子……………………中心となる事柄。

〔要　約〕

　他の段落の説明・具体例の段落は省き、次の柱の段落をつないで要約する。

［1］段落…問題提示（主語廃止論）

［3］段落…その現状と問題点

［6］段落…問題の内容

　　　　　↓

三上章の主語廃止論は、はじめは大きな抵抗に遭ったが、その主張の多くが現在では広く取り入れられている。しかし、三上が主語廃止のために「Ｘは」と「Ｘニツイテ言エバ」とを等号で結びつけた点には問題がある。（99字）

〈筆者＆出典〉浅利　誠（あさり・まこと）一九四八年（昭和23）青森県生まれ。現在、フランス国立東洋言語文化大学日本学部助教授。専門は、哲学・日本現代思想。著書に『他者なき思想』（共編著）『文化解体の想像力』（共著）など。本文は、『日本語と日本思想―本居宣長・西田幾多郎・三上章・柄谷行人』（藤原書店、二〇〇八年）より。

【読みのセオリー】

★本文と対応させて一致・不一致を把握する

　本文の内容理解を求める問題の場合、基本は、選択肢の内容がどこで述べられているかを、本文にもどって確認すること。複数の段落にわたっていても、何段落のどこと、何段落のどことかを、きちんと照らし合わせる手間を惜しまないこと。

　内容理解の問題では、「一致しているもの」か、「一致していないもの」か、問いが何を求めているかを見落とさないこと。

■読みのセオリー［実践］本文と対応させて一致・不一致を把握する

問６　選択肢アの「その主張はだれからもまったく相手にされず」は本文と一致するか？

1　「彼の主語廃止論は思わぬ　抵抗にソウグウした」とある。

　抵抗は、三上の

［１　　　　　　　　　　］

によるもので、厳しかった。

　　　　＝　つまり、

相手に［２されていた／されていなかった］のである。

　　　　↓よって

　アは、［３一致／不一致］。

（２・３はどちらかに○をつけよう）

〔解答〕　１同胞、同学の士　２されていた　３不一致

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問１　二重傍線部「形而上」の対義語を答えよ。（「学的」の傍線を取る。）

　［答］　形而下

＊差し替え

問４　28〜29行目「たった一つ不満なのは、「Ｘハ」が「Ｘニツイテ言エバ」と、等号で結びつけられてしまう方向へと横滑りしていること」を、筆者はどのように表現しているか。文中から一○字以内で抜き出して答えよ。

　［答］　一種の理論的予断（８字）・形而上学的な予断（８字）

＊新問

問７　「予断」の意味を次のように説明した場合、［　　　　］に入る漢字二字の熟語を答えよ。

前もって［　　　　］すること

　［答］　判断